0024538000

0024538-000

特２４３－７１６

植民地を喰ふ白人

日本青年外交協会・編

日本青年外交協会出版部

昭和１４

ADE

特243
716

本青年外交協會出版部

白人を

納本

白人

白人の植民地爭奪戰 —

序

日英東京會談を劃期的な契機として、われわれは全國的な反英鬪爭を戰つた。

しかし、この反英國民運動は多分に感情的な反感や義俠的な憤激に支配されてゐて、明確な對英政治意識の下に戰はれてゐない。

われわれは世界の秩序と福祉と平和に重大な發言權を持ち、且つ現下の世界の混亂を新なる秩序と平和に再組織し、世界人類に新なる福祉を保障せんとして今事變を戰つてゐる進歩的な大國の國民である。

われわれは進歩的な大國の國民としての冷徹な襟度と政治的自覺を以つて、現下の反英鬪爭を戰つてゆくべきである。

「現狀維持」對「現狀打破」、「民主主義」對「全體主義」の兩戰線で戰はれてゐる現下の世界の紛爭は、植民地問題乃至は弱少國家を舞臺として展開してゐる。

そして、この紛爭は常に英國を中心にしてゐる。

今事變を「現狀打破」の立場で戰つてゐるわれわれが反英鬪爭を戰ふのは不可避の必然性を持つてゐる。

だが、われわれは歐洲にみるが如く、植民地再分割乃至弱少國家の犧牲を踏み臺にして、「現狀打破」を戰ひ、「新秩序」を建設せんとしてゐるものではない。

弱少國家、植民地及び半植民地國家をその奴隷的狀態より解放し、彼等に、眞の獨立國家と國民の幸福と繁榮を約束し、保障せんとして、われわれは今事變を戰つてゐるのである。無論、われわれは何よりも自國の生存と發展の爲に戰つてゐる。だが、この生存と發展こそは東亞に於ける弱少國家、植民地及び半植民地國の幸福と繁榮に密接に關連してゐるのである。

われわれが「暴戾蔣政權膺懲」として戰端を切つた今事變を、「東亞解放戰爭」として、今日戰つてゐるのはこの故である。

從つて、われわれは今事變をいかに高邁な精神と思想を持ち、いかに氣高い人道主義に燃えて戰つてゐるか、と云ふ國家的な凛熱の誇りを自負すべきである。

この國家的な自負の上に起つて、われわれは今日及び今後の反英運動を戰つてゆかねばならない。

しかし、「東亞解放」の旗の下に、植民地反對の戰を戰つてゐるわれわれは、敵がただ英國のみである、と云ふ錯覺の虜になることを警戒すべきである。

世界は白人が隣國を識つて以來、非人道的な植民地征服戰爭の慘虐な歷史でつづられてきてゐる。

現在の歐米白色人種の生活も文明も繁榮も、それらは皆すべて、植民地及び半植民地國と後進弱少國の慘澹たる犧牲の上に建築されてきてゐる。彼等が「白人植民帝國」と呼ばれてゐるのもこの爲である。

この故に、反英鬪爭は必然的に歐米白人帝國の惡虐と不正に抗爭する全般的な鬪爭として戰はれねばならない。

日本青年外交協會が白人帝國の植民地侵略の問題を歷史的な觀點より、政治經濟上の觀點より、或は文化史の觀點よりとりあげて、ここに本書を發刊する所

特243
716

因は、反英闘爭を戰つてゐる現下の同胞諸兄及び來るべき新世代の人々に、植民地反對の明確な政治意識を把握することを要求し、且つ、日支事變と今後の祖國の發展方向を、現下の事變を貫ぬいてゐる至大な人道主義の精神で戰つてゆくことを期待する爲である。

昭和十四年八月

日本青年外交協會

植民地を喰ふ白人

——白人の植民地爭奪戰——

目次

一、古代の植民地爭奪
二、中世の植民地獲得
三、近世の植民地爭奪
（一）ポルトガルの植民地獲得
（二）スペインの植民地奪取
（三）オランダの植民地經營
（四）フランスの植民地活動
（五）イギリスの植民地爭奪
（六）帝政ロシアの植民地侵略
（七）ドイツの植民地獲得
（八）イタリーの植民地獲得

一、古代の植民地爭奪

中世以後の植民地問題に入るに先だつて、一應古代における植民地の爭奪に就いて一言觸れてみるのが順序だらう。近代的意味の植民地開發は、勿論、インド航路が開け、アメリカが發見された十五・六世紀以後のことであるが、それ以前にも植民事業が皆無であつたといふのではない。紀元前三千年の昔にすでに植民は行はれてゐた。勿論、この時代の植民は、重商主義時代に見るやうに國々が爭つて、植民地經營に從事するといふやうな激しい性質のものではなかつたかも知れない。ただ力のある征服者が、金銀や珍奇高價な品物を掠奪したり、異種族を征服して奴隷とするのが普通であつた。從つて古代の植民地は最も原始的な奪掠植民地であつたといひ得るものである。即ち、この時代の植民活動の目的は、中世時代のそれと同樣に、先づ珍奇な品物や奴隷を掠奪的に取得することであつた。

エジプト人は曰に紀元前三千年以上の昔にこのやうな植民をこころみてゐる。彼等は第四王朝（通説によると西暦紀元前三七六年より三五六年までの間）の頃に屢〻砂漠の剽盗民族と戰つてこれに勝ち、またシナイ半島に鑛物が多いのでこれを併合してゐる。またその後でもシナイ半島で金鑛を發掘したり、南方の紅海沿岸と交通して、珍らしいものを持ち歸つて通商の利を得たり、更に進んではエジプトの南方民族を討伐してワデイハルファにまで遠征してゐるから、相當の植民活動をしたわけである。

植民地の獲得は血と掠奪の戰ひに於てなされた。征服された種族、民族の支配者達は殺され、人民は奴隷にされ、妻や娘は征服者の妻妾にされた。例へば、アメンヘテップ二世がアジアを征服したときには、五百に餘る北方シリアの支配者達、二百四十の妻妾、二百十頭の良馬、三百の戰車を拉してテーベに凱旋し、御座船にテイクシの七王の首をかけ、親しくアメン神への犧牲とし、城門に彼等の屍六個を吊して民衆に示した。またツトメス三世は北方諸國を征服したが、そのとき彼は云つた。「見よ、朕は敗者の妻妾及び子供達を捕へ去る」と。その時の鹵獲品には、五百二十四輛の戰車、二千二百三十八頭の馬、二百領の冑、カデシ王の天幕及び家具等があり、尚カデシ王の首都メキドから巨額の金を收奪した。

戰爭による一時的な富の收奪の後、それら植民地は長くエジプトの權勢と富とを增大する源泉となつたのである。朝貢は植民地原住民の永久的義務であつた。彼等は自己の血と汗との生產物や家畜のみでなく、血肉をわけた同族の男女をさへも奴隷としてエジプトの支配者に捧げたのである。奴隷は滔々として波浪の如くエジプトに流れ込んだ。數千年の星霜を經た今日、なほ不滅のエジプト古代文明を誇るかの高山の如きピラミッドの古墳や、怪奇なるスフインクスの巨像、天を摩して聳ゆるオベリスクの方尖柱は何を物語るであらうか。ピラミッドは王の陵墓であつて、百萬以上の切石を疊積し、數百尺の高さに迄達する大三角塔であるが、これこそ當時のエジプト文明の社會的經濟的基礎であつた奴隷勞働の數萬人の十餘年に及ぶ慘憺たる苦役の結集なのである。

絕大な威勢を有するエジプトの專制君主は、太陽の子を意味するフアラオと稱せられた。王と共に王の神政を助けて治國と學問に從事する僧侶及び戰士や支配階級を形成し、その下に農工商牧等の庶民階級、最下位には捕虜となつた純粹の被征服民族の奴隷群と共に一般の搾取される勞役階級があつたのである。

その他にもテイクリス、エウフラテス兩河の流域のカルデヤ人だとか、バビロニヤだとか、

アッシリヤだとか、孰れも四方の異種族を征服したが、その中でも、アッシリヤでは勇猛な君主が現れ、四方の國々を奪ひ取つて、短い歳月に大きい國を作つた。バビロニヤを保護國にしたり、その他の地方からは貢納を命じた。また近くの地方には本國の官吏を派遣し、遠い地方では、酋長に政治を委せて稅を納めさせた。舊約聖書にも、靑絨や錦繡などで通商したと書いてあるが、彼等はスペインとも通商した形跡があるやうだ。人民換置策といふのはアッシリヤ人の創作にかかる植民政策で、本國人と征服地の住民とを入れ代はらせて同化しようといふ方法である。

この時代の植民地獲得の戰爭が文明の發展に於けるいかに痛ましい犧牲を要請したかは計り知られざるものがある。それは數千年もの今日なほヨーロッパにその不幸な運命の暗影を投げかけてゐる。現代のいはゆるユダヤ人問題はまさにこの古代植民地爭奪戰爭に於ける怨恨と復讐に滿ちた民族興亡の歷史の典型的な遺產ともみられるのである。

これまでの國々は孰れも英雄的野心に驅られるままに近隣の國々を侵して、勢力を扶植したのであるが、これより多少進步して、いはば近世的意味の經濟的慾望から活躍したものにフエニキヤ人がある。「フエニキヤ」とはギリシヤ語で「東方の人」と云ふ意味であるといふ

ことだが、彼等は地中海に面する帶のやうに狹く、ちつぽけな地方に住んでゐたから、山岳は直ぐ海まで迫つてゐるし、耕地は甚だ少ないといふ有樣だつたが、港だけは澤山あつたから、おのづから活動地盤を海外に求めないわけには行かなかつた。それに、紀元前一六〇〇年頃エジプト人がシリヤに侵入してくるし、そこの住民が難を避けてフエニキヤにやつて來るものが多くなつてきたから、さなきだに狹隘を喞つフエニキヤ人の移住は更に拍車をかけられる始末だつた。

フエニキヤ人は、最初キプロス島に移住して、鑛業に從つた。それから更に西進して、ロードス島だとか、クレーテ島だとか、黑海の沿岸地方にまでも植民地の建設に餘念がなかつた。だが、地中海だけではまだ彼等の胃袋を滿すに不足と見えてスペインにまでも遠征してガデス市を建設した。「スペイン」とは兎の巢窟を意味するさうだが、多分兎が多く棲息してゐたところから、彼等がこんな名前を附けたのだらう。その當時のスペインは到る處地上には銀塊が轉つてゐて、土人達はこれを瓦や石と同一視してゐたとは、何だか御伽話の中にでも出て來る國のやうではないか。

フエニキヤの通商や植民も、恐らくは海賊と未だ完全に分離してゐなかつたものであら

う。彼等は通商と掠奪とを、時によつて兼ね行ひつゝ古代世界の到る所に勢力を擴張し、ギリシヤ人やローマ人が現れて來るまでは、海上貿易は彼等のひとり舞臺といふ繁榮ぶりで、地中海貿易で巨利を占めてゐた。今から十數年前に、クリート島で發掘されたクノスソスの迷宮の遺跡は、同島に於けるフエニキヤ海賊の驚異すべき社會文化の廢墟である。考古學者は、そこに建つてゐた莊嚴、複雜な大殿堂の中に、水道や浴室や劇場、その他進歩せる近代的利便を享有し、精巧な染色法を應用した衣服を身に着け、インドの象牙とアフリカの寶玉を飾り、玻璃の花瓶を置いた大理石の食卓で、ブリタニアの錫とジョルジアの金を以て細工した杯にエジプトの美酒を汲み乍ら、或は奴隷と猛獸の格鬪を見物し、又は祭神の詩歌を奏で、藝術的彫刻を娛んでゐた傳說的海賊王の好奇に滿ちた生活を今日現實に描出してゐる。しかし榮枯盛衰は世のならひで、フエニキヤも通商が發展してゐる間は繁榮してゐたが、その放慢政策が祟つて、植民地が離叛し始めて、やがて衰運に傾いた。

このフエニキヤに代つたのがカルタゴである。カルタゴはフエニキヤの衰へたのに乘じて、その植民地であるサルヂニヤ、コルシカ、マルタ、バレアリツク諸島、スペインの一部をも植民地にした。それのみではない、その上更にフエニキヤ人がつくつた地中海の沿岸の

町や製造所を奪ひ取つて、地中海で覇を唱へた。また彼等はアフリカの西北部にまでも植民地を有してゐた。しかし、カルタゴは少し圖に乘りすぎて、タレンツムをも海軍で攻め取らうとすると、强敵ローマが現れて、ここに有名な第一ポエニ戰役が勃發した。この戰爭は紀元前二六四年から一四六年まで約百二十年に亙る戰爭で、前後三回の植民地爭奪戰が行はれたが、遂にカルタゴに利あらず、これから彼等の繁榮は地に墮ちて、いよいよローマの時代になつた。

さて、次ぎに近代の西洋文化の生みの母とも云ふべきギリシヤ、ローマの植民地爭奪を述べることにしよう。ギリシヤはその地勢上、良港・良灣を多數持つてゐたので、通商貿易に長じてゐた。ところが、人口は次第に增加し異種族が侵入して來たので農業や牧畜のためによりよい移住地を求めなければならなくなつた。こゝにおいてギリシヤ人はローデス島、リヂヤ、キプロス島、イオニヤ等のエーゲ海及びその沿岸に植民地を持つたばかりでなく、紀元前八〇〇年頃には、さらにヘレスポント、プロポチス、黑海竝に地中海西部の諸地方にまでも植民をこころみた。またイタリー南部及びシシリヤ島の氣候や風土がギリシヤと類似してゐるといふので、好んでギリシヤ人はこの地に移住して、紀元前九〇〇年頃には今のタラ

ント灣附近にメタポントムを興し、更にシリス、シバリス、クロトン、タレンツム等の諸市を建設した。タレンツムはその人民の文化が高く、紀元前二七二年頃ローマがこれを征服した時まで、獨立を維持してゐた。更に紀元前六百年頃に、ギリシヤの一商人がジブラルタル附近のタルテソスに漂着したのがきつかけになつて、ここに植民したといはれてゐる。要するに、ギリシヤの植民地はエーゲ海、小アジア、イタリー沿岸、黑海地方がその主要な地域であつて、アフリカの海岸・地中海の西部等においては、カルタゴ人に妨げられて充分に驥足を伸し得なかつた。

ここでペルシヤとギリシヤがイオニヤ植民地を中心に爭覇したペルシヤ戰爭を擧げて置く要がある。ペルシヤはフエニキヤを征服してから、次第に海外貿易に手を染め、地中海の制海權をも把握するやうになつて來た。しかるに海外に新天地を求めてゐたギリシヤ、殊にアテネがこれに對して好敵手となつたことは言を俟たない。かくて、小アジアのイオニヤ植民地のことがきつかけとなつて、所謂ペルシヤ戰爭が勃發した。第一回・第二回ともペルシヤ側の失敗に終り、第三回戰役はペルシヤ側の非常な決心の下に開戰された結果、ギリシヤも、本土を荒され、一時危機に瀕した程だつたが、最後に大捷を博して、ペルシヤ軍のみじめな

敗退に終つた。

小ギリシヤ民族が大ペルシヤ王軍をして和を乞はしめたのは、第一にアテネの優れた海軍力、次でスパルタの陸軍力に負ふものであつた。この勝利によつて東部地中海及び黑海沿岸一帶の水上貿易の覇權はアテネに歸し、莫大な富が各植民地或は從屬國からアテネに流入した。ヘレネ文明の輝しい精華は實にこのアテネ商人の財布の底に光る黃金の力によつて生れたと云つても過言ではない。無數のアテネ商船を指揮して、四方の植民地或は通商國から富を吸收した富豪の力は、アテネの王權を覆して民主制を打立てる源泉となつたものである。陪審裁判や貝殼投票、公民會議等が制定され、政府は神殿、街路、水道、築港、劇場、圖書館等の公共施設を行つた。アテネは當時の世界の中心として華美豐麗な文化を產出し、哲學、工藝、文學、美術等は空前の發展を見た。

しかし、我々はこの文明の土臺、アテネ民主共和國の富人政治の裏に潛む大いなる黑影を見逃してはならない。即ちその全盛時代に於ける人口五十萬のうち、參政權を有する市民の數は僅か九萬に過ぎず、その他は三十六萬五千人が奴隷、殘りは在留外國人及び解放された前奴隷であつたといふ事實がこれである。全ギリシヤ文明の生ける人柱となつたこれら無數

の奴隷は、一切の權利と自由を剝奪されて、飽くなき搾取と壓制の下に呻吟しつゝ、享樂に耽る主人達のために一切の生活物資を生産し、軍艦や商船の中で鐵鎖につながれて營々として世界の富をアテネに運搬する苦役に堪へ、無慈悲な鞭の虐使に甘んじて働いてゐたのであつた。

スパルタに於ては、被征服者は國家の奴隷とされ、ヘロイテスと呼ばれてゐた。ヘロイテスは征服者、公民――スパルチアタイ――に屬する土地に於て、自分の主人のために自分自身の農具を用ひて耕作したのである。ヘロイテスの勞働によつて生活してゐたスパルチアタイは、農奴の再三の叛亂や近隣諸國の來寇や植民地の變を恐れて強大な軍事的組織を維持しなければならなかつた。

ギリシヤ人のうち、植民地に移住したのは住民中の極貧層であつた。彼等は、土地の狹小なためと、政治的に無權利となつたためとによつて、新しい土地を求めて故國を去つたのである。各植民地とヘラス本國との間には、緊密な經濟的及び文化的なつながりがあつた。植民地の住民は、ヘラスにおいて獲得され製造される各種の品物を必要とした。同時に、近隣特に東方諸國から、金屬の採掘加工、ガラス製造等の技術を傳承した。紀元前七世紀の終り

から六世紀にかけて、ヘラスと各植民地との間には旺に貿易が行はれた。ヘラスは農業と手工業生産物、即ちオリーヴ油、酒、什器、織物、革具、金屬具、武器等を輸出し、又イタリーやシシリーから穀物を、トラキアから木材と金屬、黑海沿岸から穀物、鹽漬の魚、鑛石、及び最後に生きた商品として奴隷を輸入した。奴隷は輸入の大項目であつた。アテネへだけでも年々三十萬乃至四十萬金ルーブルの價値をもつて三、四千人の奴隷が輸入された。この奴隷は主として、黑海沿岸の草原地方の住民、バルカン半島の北部スキチアの遊牧民その他の場所から得られたものである。

元來不毛の地であつたギリシヤでは、スパルタに於ける少數の農奴を除いては、農業のために奴隷を使役することは割合に少かつた。ギリシヤはその有利な地理上の地位によつて商業が發展し、植民地貿易や、商品生産の手工場仕事場等に於て多數の奴隷が使用されたのである。

無數の被征服民奴隷や購入された異民族奴隷の氾濫によつて、ギリシヤの自由市民は自己の職を失ひ、生活に窮して遂に自ら奴隷となるものが增大し、こゝにギリシヤの內訌・衰因の重大な基礎を作るに至つたのである。

イタリアは、不毛のギリシヤとは異つて農業國であつた。しかし、その社會は勞働力乏しくて生產物は極めて少なかつた。そこですべての被征服地方はローマの權力下に立つ州郡となつて、必ず年々一定の穀物、織物、家畜、その他金銀財寶の貢納を强制され、地方住民のうちのすべての强壯な男子、美貌の婦女、有能な職人や學者や藝術家等は悉く之を捕虜としてローマに送り、奴隷とせられた。尨大な富が當時の世界のあらゆる隅々からローマへ流れ込んだ。すべての富はローマの門閥家の手におち、彼等は素晴しい勢でその財產を殖やした。ローマは數千の奴隷と大土地との所有者の都市になつた。イタリアには、當初は大土地所有は存在しなかつた。貨幣經濟の發達をひき起した安價な奴隷勞働の尨大な輸入と貴金屬の輸入、その他による貨幣資本の增大とは、從來の小土地所有者の經濟に破滅をもたらした。シシリー、エジプト、アフリカ等の植民地からの穀物の輸入はイタリーに於ける農產物の價格を急激に下落せしめ、小土地所有者は貧困に追はれて父祖傳來の地を二束三文で賣却しなければならなくなつた。彼等は故鄕を去つて都市に流れ込んだが、そこでも尨大安價な奴隷勞働に壓迫されて遂に市民權あるルンペン・プロレタリアートに墮するの外はなかつた。

紀元前二世紀の終り頃には、イタリアには大私有地が一般的となつた。いはゆるラティフンデイウムといふのがそれである。かうした狀態はローマの植民地諸州、卽ちシシリー・イスパニア、北アフリカ等にも發生した。そこでは奴隷が廣く使用され、大私有地では數千人に上つた。部隊に區分された奴隷は、鐵鎖をはめられて殘酷な監督者の鞭の下に苦役についた。しかし鑛山や石切場に於ける奴隷の搾取は特に悲慘であつた。ギリシヤと同樣にローマでも、奴隷は事務所や商店にも勤めたが、更に下級官吏の役目も行つた。ローマに於いては奴隷の地位は、ギリシヤのそれよりも一層重要であると共に、また一層悲慘であつた。ローマ法は奴隷は人間に非ずと規定した。彼等は牛馬と等しき「物云ふ家畜」として、その所有者達によつて生殺與奪の權を握られてゐたのである。

ローマは强大なる世界帝國を誇つたが、しかしそれは他面に於て植民地に對する寄生國家としての弱點をどうすることも出來なかつた。それらの屬領や植民地からの奴隷と物資との供給なしには、ローマは一年と雖もその獨立的存在を營むことが出來なかつたのである。從つて奴隷の反亂と植民地の背反とは、ローマ帝國の宿命的な癌となつたのである。例へば、紀元前二一六年に、カルタゴの將ハンニバルがカンネーに於てローマの軍隊を全滅せしめたと

きの如き、ローマの同盟諸國は大多數ローマに叛き、植民地の被從屬民族は一せいに叛亂を起したことがある。

ローマに於ける奴隷の叛亂は餘りにも有名である。各所に頻發した大小の奴隷一揆は悉く鎭壓されたが、その都度彼等は殘虐な處刑を受けた、シシリー全島の奴隷烽起の時には、二萬人のものが政府の手で虐殺されたが、それでも叛亂は止まなかつた。今から約二千年前に、圓形劇場の獸檻から脫出した格鬪士の一群は、スパルタカスといふ人物を首魁としてヴエスヴイアス火山に立籠り、奴隷の大群を糾合して一大內亂を起した。內亂は四ケ年も續いて、叛徒は一時イタリアの南半を壓倒せんとしたが、遂に力足らずして征服された。此內亂の恐怖によつて殘虐性を刺戟された支配者は、六千人の捕虜をアソピン大道の兩側に竝べ集めた見物人の前で、一人宛磔にし、磔にされた屍は幾哩となく道に沿つて吊り下つてゐたといふ。

スパルタカスの內亂に續いた政府の恐怖政策によつて奴隷の叛亂は次第に衰へたが、しかしローマ帝國の矛盾は、キリスト教的祕密結社として宗教的裝衣の下に發展して行つた。キリストは同胞愛を說いて階級的差別を無視し、金權を賴む富者を卑しみ、經濟的平等を主張

して、社會の改革を叫んだ。ローマの抑壓に苦んだ植民地や奴隷階級はローマの迫害にも拘らず翕然として之に從つたのである。キリストは間もなく植民總督の官吏に捕はれ、獨立謀叛の煽動者として死刑にされたが、これは却つて門徒の反抗に油を注ぐことになつたのである。後にキリスト教はローマの國教となつて了つたが、貴族と平民、奴隷所有者と奴隷、本國と植民地との對立は、遂にさしも强大を誇つた大ローマ帝國を崩壞させる主要因となつたのである。

次に、ローマの植民に就いて概觀してみたい。ローマの全般に就いて述べることは、限られた紙數ではかなり困難なことである。だからその著しい特色のみを拾つてみると、彼等は征服欲に强かつたから、破壞された町々や、服屬した都市の一部分を割いて、そこにローマの移民を送り、植民市の建設を計つた。そして、これらの植民市の多くは、本國の屬領として、首府ローマから派遣された知事の支配を受けてゐた。大ローマ帝國は、ローマを中心としてその屬領、保護領、從屬の同盟國から成り、その版圖は東はメソポタミヤ、小アジア、エジプトから、南はアフリカ北岸、西はイベリヤ半島北はエルベ河からライン、及びダニューブ流域に至るまでの廣大な世界帝國であつた。しかし、あまりにもローマ帝國は世界的と

なつたために、統一を維持するのに困難となつたところへゲルマン民族の侵入といふ外部的事情が加はつて、ローマの沒落の因を爲したことは周知のことである。しかしローマの植民はフエニキヤやギリシヤのそれと異り、中央集權主義の下に全領域を鞏固に結成してゐたところに特色がある。

二、中世における植民地獲得

次に中世の植民地に就いて一通りの解說をこころみるべきだらう。ヨーロツパの中世は歷史上所謂暗黑時代と稱せられる時期で、紀元五世紀の西ローマ帝國滅亡から十五・六世紀の發見時代に至るまで、約十世紀に亙るもので、一般文化史においてあまり見るべきものがないやうに、植民事業も亦萎靡して振はなかつた時代である。ギリシヤ・ローマの文化は地を拂つて、歐洲の天地には爭亂の絕ゆる時とてなかつたが、中世の末期には都市が勃興し、通

商貿易が行はれ、植民的活動も處々に見られた。ローマ帝國が瓦解してから、イタリーに發達した都市は地中海において、また北ドイツに現れた自由都市は北海及びバルト海において、それぞれ商業的活動を試み、ノルマン人は遠く大西洋の彼方へまで遠征したといはれてゐる。

此等の諸都市の間には勿論植民地爭奪が行はれた。例へば、アマルフイはローマ帝政時代の植民地より發達した都市であるが、十二世紀頃より既に通商航海に從事してゐた。その植民地は多く東方に散在して、コンスタンチノープル、アレキサンドリヤ、バグダツド、エルサレム、チユニス等より商業上の特權を獲得してゐた。しかるに、その後彼等はシシリー島を攻略せんとして、遂に成らず、長年月の戰爭の結果、一一三五年頃には、アルノ河口に位するピザのために併合される憂き目を見た。

ピザはアマルフイを破つて以來頭角を現はし、シリア、アンチオキヤ等にまで植民し、更に、コルシカ、エルバ、バレアリツク諸島をも領有するに至つた。だが、紀元一一一九年、ピザの裁判官がジエノヴアのコルシカ植民地に對し失當の措置をなしたといふことが動機となつて、兩者の間に戰端が開始され、二百年に亙る爭ひとなつた。そして遂にピザは、敗戰

の結果獨立を失つて、フイレンツエに併合された。フイレンツエは商工業上に華かな活躍をなし、後世に遺した功績は顯著なものがあつたが、植民上では、殆んど見るべきものがなかつたといつてもよい。

これに較べると、近世植民史上最も記憶さるべきコロンブスを生んだジエノヴアは、それだけでも輝かしい業蹟をなしたといへる。ジエノヴア人は十一世紀の中頃強大なる艦隊を以てスペインに遠征を試み、アルメリヤ、トルトサを併合した。更にミノルカ島もこの頃ジエノヴアの領有に歸した。けれども、その後、ヴエニスのために破られ、その領地の大部分をヴエニスに奪はれて再起不能にまで立至つた。

ヴエニスはその起原が杳として判明しないが、五世紀頃北狄蠻人の侵入の際、その本土を遁れて海岸よりあまり遠くない此の地に逃げて來た亡命者であることだけは確らしい。その來歴はともかくとしてヴエニス人は極めて太膽に植民地膨脹をこころみたので、彼等が地中海における商權を全く掌握したことは、十九世紀のイギリスの世界商權把握にも比較できるであらう。しかしながら彼等の隆盛は長續きがしなかつた。卽ち、世界の活動の舞臺が新航路と新大陸の發見の結果、地中海より大西洋、或ひは印度洋に遷つたことや、またスペイン、ポルトガル等の新强國が新天地に華々しい活躍をするやうになつたことなどが、ヴエニスを衰滅に赴かしめた原因である。けれども、ヴエニスの後代に對する影響はもちろん無視出來ない。スペイン、ポルトガル、イギリス等の新植民國は、孰れも、ヴエニスの知識と技術から學ぶ處が多く、それに勵されて植民を開始したといはれる程である。

この他にも、北歐人のノルマンの植民活動がある。彼等は八世紀の初期までは現れなかつたが、同世紀の末期には海賊船に乘つて、北海や大西洋に現れたり、處々に多くの移住地を持つに至つた。ノールウエー人は八六〇年頃アイスランドを發見して、こゝに植民をした。

ハンザ同盟の諸都市の植民も亦注目すべきものがある。この同盟は初め海賊や封建君主の攻擊に對する共同防衛上、諸都市が一致團結してつくつたものであるが、それが發展し、やがて獨占的な傾向を辿るに至つて、相互の間にも競爭心が生じ、十六世紀初頭の發見時代が商業の中心を大西洋に移した結果、この基礎は次第に衰へ、十七世紀の中葉には全く瓦解の止むなきに至つた。

三、近世の植民地の爭奪

歴史上の所謂暗黑時代が過ぎて、十五・六世紀の發見時代に入つてから、ヨーロッパ人の植民活動が俄に勃興した。長い間の惰眠から目覺めて、彼等の眼は一層廣い世界に向けて開かれたのだ。それまでは中世における東方と西洋との交通は主として、陸路によつたものであるが、十四世紀の頃勃興したオスマン・トルコは、東ローマ帝國の衰微に乘じて領土を擴大し、やがては東方と西歐との主要交通路であるシリヤ、エジプト地方をも征服した。そして、この地を通過する東方の産物に重稅を課した結果、東西の交通は兩斷せられて、西ヨーロッパ人はトルコの領土を通過しないで、直接原産地から商品を輸入したいといふ念願を抱いた。その場合、海路による外に道がなかつたから、自然と航海術の研究が盛んになつた。ヂエノアの航海家、クリスファ・コロンブス（一四四六―一五〇六年）がスペイン王の爲に働いてアメリカ大陸を發見したのに始まり、ポルトガル人、ヴアスコ・ダ・ガマの喜望峰廻航による印度航路の發見（一四九八年）同じくポルトガルの航海家フエルデイナンド・マゼランによるマゼラン海峽經由の世界廻航の成功等の華々しい發見の數々は、實にその由來を尋ねてみれば、ヨーロッパ人の東洋に對する、止むに止まれぬ熾烈な憧憬に基いてゐるといへるだらう。この間の消息をわれわれに傳へてゐるものに、マルコ・ポロの旅行記がある。彼はその旅行記の中で、東洋や日本に對して、限りなき憧れの念を述べてゐる。かうした純眞な憧憬の外に、當時のヨーロッパに於ける新しい政治的、經濟的な原因を見逃すことは出來ない。中世紀以來の封建的貴族の地位は漸くその根底を奪はれつゝある一方に於て、原始蓄積の時代を過ぎて益々巨大な經濟的勢力を獲得した第三階級は、都市の國民的團結を組織して王の政治的權力と結び、封建諸侯に對抗して集權的統一國家を支持し、その援護の下に大規模な海岸貿易や植民地探檢を試みてその利潤を增大せんとしたのである。重商主義國家政策としての保護貿易と植民地の大爭奪戰との時代がこゝに發展するに至つたのである。

一、ポルトガルの植民

ポルトガルはその地勢が海外發展するのに、適當な位置を占めてゐるうへまた住民も屢〻ムーア人やヴエネチヤ人の侵入を受けて、惡戰に慣れた結果、その堅忍不拔の海外發展の意氣は甚だ熾んなものがあつた。前にも述べたヴアスコ・ダ・ガマやマゼラン等の熱心な航海者が現れて、新しい發見に寄與したのは蓋し偶然ではない。

ポルトガル人をして海外發見をなさしめた間接の原因は、中世以來イベリヤ半島を攻略した回教徒に對する敵愾心と、ヴエネチヤ人の東洋貿易獨占に對する嫉妬心であつたが、直接の動機はやはり東洋に航して黃金、寶石等を獲たいといふ、多分の「東洋」なる夢を乘せた經濟的の慾望であつた。勿論これにはコンスタンチノープルが回教徒トルコの手に落ちて、東洋諸國への通路が杜絶したといふ理由もあらうが、それは前に述べた通りである。東洋航路發見の端緒は、サハラ沙漠西海岸の航行と奴隷狩りとを以て始まつたものである。十三・四世紀にはジエノア人が、十五世紀の初期にはポルトガル人がこれに從事したが、これが一

段落したときに、はじめてインド航路が開かれることになつたのである。サハラ沙漠の大西洋岸は、セネガル河に灌漑されてゐる豐饒な地として、ジエノア人やポルトガル人によつてビラド・ガーナ(富の國)と呼ばれた。その土人は純粹の黑人種であつて、混血黑人と區別され、奴隷としてその從順な性質を尊重され、ポルトガル人やイスパニヤ人はマウル人の奴隷賣買業者からこれを購入してゐたのである。後、一四一五年、ポルトガルがセウタを占領して以來、アフリカ西北部の沿海制覇權を掌握した。その後急速に發展したポルトガルの植民地獲得は、奴隷貿易によつて生ずる利益を以てその費用を支給されたのである。

新しい世界が發見されると、ポルトガル・スペインの兩國は競つて貿易及び植民地に熱中しはじめた。ポルトガルはインド航路の發見者として、人口稀少なアメリカよりも、人口が多く物產豐かな東洋方面の經營に力を盡した。彼等はインドのカリカツトの南方海岸に土地を占領してこれを策源地とした。また本國との連絡を安全にするために、アフリカ海岸の要地を奪ひ、この方面に活躍してゐたアラビヤ人を驅逐した。そして、副王を置いて經營させたが、アラビヤ商人や無智な土民相手に抗爭しながら商權を確立するにはずゐぶん骨が折れた。アルブケルケは最も有名な副王であるが、彼はペルシヤ灣頭のオルムズを占領し、此の

方面を航行するアラビアの商船を掠奪した。その頃異教徒に對するキリスト教徒の敵愾心は相當强かつたらしい。アルブケルケ等の盡力によつて東洋におけるポルトガルの勢力はその基礎の確立を見たのであるが、彼等はインド貿易を獨占し、更に一五一〇年にはゴア市を開き、セイロン島を奪ひ、更に進んでマレイ半島のマラツカを取り、更に香料產地として有名なモルツカ諸島を探檢した。しかし、この時、マジエランの船隊の一行と遭遇して、この地の所屬について紛議が生じたが、モルツカはポルトガルの領有と決定された。

さらにまた、彼等は東インド諸島の香料貿易を獨占するに至つた。また支那からマカオを租借したり、一五四三年には我が種子ケ島に漂着したりして、我國にヨーロッパ人渡來の濫觴をなしたなどはわれわれの記憶すべき事實であらう。其の後ポルトガル人は平戸に商館を置いて、我國と貿易をした。

かやうに、東洋貿易は殆んどポルトガル人の獨占する處となつて、今迄東方の貿易に從事してゐた地中海沿岸のアレクサンドリヤ、ヴェニス等は次第に衰運に向つた。ドイツのハンザ同盟も北歐における貨物中繼の利を失ふに至つて、世界の貿易の中心は、地中海及び中央ヨーロッパを去つて大西洋に移つたのである。かくて、リスボンは東方貨物集散の中心地たる觀を呈するに至つた。

二、スペインの植民

ポルトガルが東洋方面に活躍舞臺を見出したのに對して、スペインは專ら西方で活躍した。アメリカ大陸では一五〇〇年にポルトガルが發見したブラジルと北アメリカの北部とを除いては殆ど全部スペインの有に歸した。一五二一年にコルテスはメキシコを征服し、これに次いでピザルロはペルーのインカ帝國を亡ぼして、これを奪つた。しかし、ここで特記すべきことは、彼等の植民政策が極めて殘忍であつたといふことだ。

コルテスは三十四歲のとき、知事の意志に反して當時黃金の國と信ぜられたメキシコに遠征した。彼は七百の步兵と十六頭の馬を率ゐてヴエラクルーヅに侵入し、破竹の勢を以て到る處で敵と鬪つた。酷暑に惱まされ、土人の毒矢と鬪ひながら、縱橫の機略を用ひて首都を包圍すること七十五日、つひに一五二一年に平定することを得た。その際アズテック族を斬ること四萬人、王をも殺害して六十萬圓の黃金と無數の寶石を奪ひ、これを本國に輸送し

て、自ら新スペイン（西領アメリカ）最初の副王となつた。コルテスの報告書は、當時彼がメキシコで遭遇した種々の驚くべき事情に就いて描寫してゐる。彼が土人に對して可成り強壓手段を用ひたことは歴史に明かであるが、かかる殘虐行爲は、特にペルーの遠征の際に激しかつた。

メキシコの征服後十年——一五三二年フランシスコ・ピザルロは南米に進んで、ペルーを遠征した。王は代々インカと稱して、人民はよく服從してゐた。首府クスコのインカの宮殿は黄金に充ち滿ちてゐた。ピザルロは、二十五頭の馬と百八十名のスペイン人を率ゐて侵入したために、忽ち黄金の宮殿は虐殺と掠奪の巷と化した。インカは捕へられて、ピザルロの手の屆く限りの黄金を積み上げて助命を乞うたけれども、ピザルロは詐つてこれを許したばかりでなく、宮殿を隈なく探して、黄金什器約三千萬圓を奪つた上、インカの首を刎ねたといふ話である。

斯くの如き殘忍な强盜行爲はいたるところで行はれたので、苛酷な方法で土人を使役して土地の開拓を行つたり、鑛山を採掘したりした。當時、かかる殘忍な植民地征服者を「コンキュスタドーレス」と呼んだ。これはスペイン語で勝利者の意味で、身は鐵のやうに頑强で

晝となく夜となく山河を登渉して倦むことを知らない豪勇な植民地經營者の別名である。彼等は金銀のためには何物も犧牲にすることも顧みない、土人に對してはあらゆる殘虐掠奪の限りを盡した。即ち暴力を借りてアメリカを侵略した上、これから名聲と富とを得ようとしたわけで、當時は一般にかかる行爲は目を背けながらも默認されてゐたのだ。

このやうな過酷な態度はアメリカ・インディアン支配の上にも現れた。イサベラは熱心な舊教信者であつたから、新領土の土人を基督教徒にしようと多數の宣教師を派遣したが、土人の多くは肯じないので、ためにこれを奴隷として酷使する風が生じた。また土地の開發に最も必要なものは勞力の供給であるが、異民族に取卷かれて、心性の荒み果てた植民者達は勢ひ土人を驅使して過酷な勞役を强ひて、若しこれに從はない場合には、無殘な體刑を加へたりして、非人道な行爲が多かつた。その他、スペイン人は、金銀の鑛山の採掘や農場經營上必要な勞力をどうして得たであらうか。

彼等はインディアンの身體の自由を奪つた上、入用だけの勞働を强制し、若し逃亡したり反抗したりする場合には、人間といふよりは寧ろ獸類のやうに取扱つて、甚しい凌辱や刑罰を加へた。兩腕を切斷したり、甚だしいものになるとこれを焚殺するといふ如きことも決し

て稀なことではなかつた。また所謂「人間狩」を行つて、鑛山採掘の勞力を補給した。これは鑛山地附近の蠻地に別け入つて、インディアンを捕獲した上、奴隷にして採鑛の勞働を强制する方法である。この虐待に對しては本國政府も弊風を除かうと努めたが甲斐がなかつた。けれども、その後ドミニカン派の傳道師ラス・リカサスは前後五十年の永きに亙つてインド人の教化に努めたが、遂に「インド人保護法」を本國政府から發布させた。

以上のやうにスペインは東方香料諸島との貿易はポルトガルに奪はれたが、アメリカの奴隷を酷使して探掘した金銀は一躍本國の富を增加させ、そのうへ軍備も强大となつたので、一時はヨーロッパに覇を唱へるに至つた。また東洋方面でも、フイリツピンを占領したり、又我國にも渡來したことがある。

世界が目の前でスペインやポルトガルの手に歸さうとしてゐるのに、後世植民王ともならうといふイギリスやフランスがどうしてこれを默視し得よう。彼等も亦東洋貿易の利益に着眼して、ポルトガル、スペインの着手しない航路の發見に努力した。コロンブスのアメリカ大陸發見後間もなくイタリヤ人ジョン・カボツトはイギリス王ヘンリー七世の命令を受けて新大陸に赴いた。又その子のセバスチアン・カボツトは一五一七年ハドソン灣地方を探檢した。フランス・オランダ等の航海者もこの方面に活動した。彼等の北氷洋方面から東洋航路發見の企ては、もちろん失敗したが、已に此の時代に、やがて彼等が植民的帝國となるべき萌芽は見られるので、スペイン、ポルトガルを凌駕するまでには、未だ長い歳月を要したといふまでである。

三、オランダの植民

オランダはスペインに叛旗をひるがへして、獨立した新興の國である。ポルトガルの王位がフイリツプ二世によつて兼攝された結果として、フイリツプ二世は東亞兩半球の新航路、新領土を一手に掌握して、その勢ひは當るべからざるものがあつた。スペイン王國の海外植民地は殆んど倍加され、世界史上はじめて太陽の沒することのない大帝國が實現した。けれども、イスパニヤのフイリツプ二世の宗教的統一策はイベリヤ半島では上首尾だつたが、ネーデルランドでは蹉跌に終つた。彼の極端の壓迫は、オランダの舊制を全く無視した結果叛亂を企てるものが多くなり、一五七九年に至つて、北部七州はイスパニヤに對抗して、一聯

邦共和國を建設するやうになつた。時あだかもオランダの尻押しをしてゐたイギリスの艦隊がフイリツプの無敵艦隊を打ち破つたから、オランダにとつて全く千載一遇の好機であつたのだ。こんな動機から、スペインの世界的覇業は轉落の一路をたどつて、やがてオランダが之に代るやうになつた。オランダの獨立戰役は約四十年にも亙つたが、その眞の獨立は一六四八年のウエストフアリヤ條約によつてイスパニヤに確認された時である。

オランダ人は夙くから海運事業を以て聞えてゐる。近世初めには中世時代ハンザが獨占してゐたバルト海の貿易を奪つて、イスパニヤ、ポルトガル人の齎す東洋の財貨を、北歐諸國に送つて生計を立ててゐた。獨立戰爭がはじまると、もちろん西・蘭の兩國との貿易は禁ぜられたから、しきりに拿捕私船を海上に出して、兩國の商船を掠奪した。これを彼等はゼーゴイセンと稱してゐた。彼等は東洋方面にまでも活動の分野を擴げて、西班牙、葡萄牙の貿易に割り込んだり、又一六〇二年には有名な東印度會社を組織した。一六二一年には西インド會社を興して、西・蘭の艦隊とその植民地と商權とを鎬をけづつて爭奪した。さうして、東にはジヤヴア、マラツカ、スマトラ、セイロン、ケープ等の植民地を獲得し、西方には北米海岸のギヤナ、ニュー・ネーデルランドを手に入れた。

ここで考へられるのは、西、葡の植民事業の失敗した原因である。彼等はどちらかと云へば南國的なローマンチツクな氣分を多分に持つて、冒險のために冒險を愛するといふ氣風があつた。それだから、むろん目的は商業にあつたであらうけれども、探檢それ自身に興味を持つて、次から次へと國旗を打ち樹てて土人を征服して行くのが何よりの樂しみらしかつた。一歩一歩地盤を固めて行くといふよりは、むしろ思ふ存分進み拔いて、その冒險心を滿足させるといふ風な處がある。これに比較すると、オランダやイギリスの植民者達は、どこまでも堅實な歩みを進めて、少しも危げがない。さうして、結局後者の方が次第に前者を押しのけるといふことは、われわれのまわりにも見る現實の問題である。イスパニヤやポルトガルはまた自國の利益本位のみを考へて植民地の疲弊を顧慮しなかつたと云ふ非難も當るので、オランダはもつぱら商業的立場に立つてゐたことが却つて成功の基をなした。ことに最も有望だと考へられた東洋貿易がイスパニヤやポルトガルの手を離れて、オランダの掌中に歸したことで、この方面に現れた强敵イギリスをも打ち負かして、專らその利を樂しんだ。江戸時代に日本と通商したのは支那とオランダ二國だけだつたが、上述の理由のためだ。實に十七世紀はオランダの全盛時代であつた。東洋、インドの商權を一手に引受けて、ヨ

ーロッパ第一の商業國として、その富裕なことは全歐に冠たる有樣だつた。アムステルダムは歐洲の金融界の中心となつて、從來盛んだつたアントウエルプをも凌ぐ有樣だつた。またルーベンスとかレンブラントなどの特色ある畫家も、彼等の富裕で、活氣のある國民生活の中から生れた。けれども、十八世紀に入つてから、政治は不振になる、商業、文化も漸次他の壓迫を受ける、卽ちあまりにも商業主義で押し通したオランダはその商業主義のために衰へるといふ皮肉な結果になつた。さうして、オランダに代つて植民史上に頭を擡げて來たのはイギリスである。イギリスの植民に就いては更に後で述べることにして、オランダと交渉のあつた限りでは、一七九五年スマトラのオランダ領は全部イギリスに奪はれたし、ジヤバ(一八一二年)ボルネオのバンジエルマシン(一八一二年)も英國の手に入つた。しかし、ナポレオンの失脚した後で、列國會議の結果、喜望峰及びセイロン島の植民地を失つたのみで、最良のものは回復することが出來た。又英國とオランダとの間に一八二四年に倫敦條約が結ばれた。この條約で、スマトラの英領ベンクーレンとマレー半島の蘭領マラツカを互に交換し合つて、それらを第三國に讓り渡してはならないといふことが規定された。オランダは印度半島、セイロン、ケープに對する領有權を放棄して、その代りにジヤバ、スマトラ等を確

實に領有するやうになつた。けれども、英國の植民地はどしどしオランダのそれを押しのけた。それはシンガポールの勃興のためである。

四、フランスの植民

次に、フランスの植民狀況に就いて、一通り述べてみよう。今ではフランスは世界の二大植民國として英國に次ぐ地位を占めてゐるが、これらは主として十九世紀に入つてから領有されたもので、これ以前のフランス植民地の大多數は十八世紀の終り頃に何れもフランスの手から離れた。だから、フランスの植民史は二期に分けて考へられる。第一期は十六世紀から十八世紀の終りまで、第二期は十九世紀から現在までの期間である。

十八世紀終りまでのフランスの植民は結局失敗の記錄であつたと云はねばならない。もちろん失敗の原因としては國內の擾亂、國力の不足等も擧げられようが、それよりもフランス人自身の性格が植民に不適當なのであると見る方が一層正鵠を得てゐるのではあるまいか。彼等は遠大な抱負を持つて、巧妙な計畫を樹てるが、その實忍耐心に乏しく、長期に亙る開

拓や施設などにはあまり向いてゐないとも考へられる。各地に存在した植民地は、英國や西班牙の一撃に逢ふと他愛もなく潰滅に瀕する。これは、英國やオランダと對抗して領地の擴張には腐心するが、國民の移住とか土地經營などの植民事業の地固めが不充分なためではあるまいか。彼等に深い影響を與へた思想家モンテスキューやヴォルテールは一切の植民政策は極めて愚かな勢力の浪費で、また人道に反する暴行だと云つて反對してゐるところを見ても彼等の國民性が窺はれる。

けれども、彼等が全然植民事業に振り向かなかつたかと云へば、さうではなく、已に一五四一年フランシス一世の頃、カルチエーは二百名よりなる移民の一團を率ゐて、カナダで植民の端緒を開いてゐる。それに刺戟されて、一五五六年には、ブラジルのリオ・デ・ジヤネイロへユグノーの移住民が出掛けたが、これは僅か四年でポルトガル人に逐はれるといふ苦い經驗に逢つた。それから後もリシユリユーやコルベール等の聰明な政治家が現れて何れも植民政策のために全力を傾倒した。リシユリユーはギヤナに植民地を始めたが、これは失敗に歸した。しかし、コルベールは植民政策に力を盡したのに、インド、アフリカ、西インド、カナダ、南米等には多數の植民地を領有することになり、本國政府の指揮操縦にも間然すると

ころがないので、英國の植民史家カルデコットは「歐洲の植民史上、ポルトガルのプリンス・ヘンリーの外に、コルベールに比肩すべき人物はなく、英國の政治家の中にもコルベールの如き位置を占めるものはない」と激賞してゐる。

さて第二期の十九世紀以後に話を移してみると、十九世紀になつてからフランスは活躍を開始して、一八三〇年頃より漸く植民地の擴張を圖るやうに成つた。即ち一八三〇年より一八五七年までの間に、アルジエリヤを征服し、一八四三年にはアイヴオリー・コー・ストを取り、アメリカではギヤナに勢力を擴張し、大洋洲ではマルケサス(一八四一年)、ニューカレドニヤ(一八五四年)を取つた。猶ほ一八六一年にはアジアでは、交趾支那を、一八六二年には東蒲塞を併せ、又このころよりアフリカ内地の植民地は甚だしく增大して、一八六四年には東海岸にオボックとソマリー海岸を占領した。けれども、十九世紀に入つてから獲得した植民地は、面積こそ老大であるが、主に熱帶地方で、極めて寡雨の地方か、多濕高溫地帶で、富源に乏しく移住に不適であることを念頭に置く必要があらう。

もちろんこれ等のどれも、たやすく彼等の掌中に入つたといふわけではない。例へばアルジエリヤの場合などには、英國との間にも砲火が交へられてゐる。アルジエリヤは久しい前

より、回教の民族によつて占められて、彼等は勇敢で、自覺があり、その文明は進歩して、社會組織も堅實であつたから、彼等は自己の特色のある宗教上の信仰や風俗、習慣を固守して、他國の風習に同化することを好まなかつた。フランスはアルジエリヤに古くから佛租界を置いて、アルジエリヤ大守に貢稅を納めてゐたところ、一八一五年に貢稅の額やその他のことで紛議が起きあがつて、フランス人は土人の怨恨を買ひ、總領事は面部を毆打されて、官舍より放逐されるといふやうな騷ぎがあつた。

フランスはなるべく軍事的の處置を避けるやうにしたが、軍艦が砲擊されたのでこれに應戰した。英國もアルジエリヤに深い關係があつたので、フランス人の商店を占領したり、アルジエリヤを襲擊するなどいふ紛紜があつたけれども佛人は益々奮起して、一八三〇年にフランスの目的は達せられたが、その爭鬪は一八四七年まで繼續してゐる。けれども、回教徒との接觸はフランスの文化に深い足跡を殘した。

其の他に、マダガスカル島も一六四八年にリシユリューが經營を始めて、一六八六年には形式上のフランス領となつた。しかし、ホヴアス族等の頑强な抵抗があつて、正式に佛領となつたのは十九世紀の末であつた。

ここで話の方向を變へて、フランスとイギリスとが十七世紀末から長期に亙つて、植民地を中心に抗爭したことに觸れてみよう。

歷史家シーレーが「英佛の第二回百年戰役」と呼んでゐる英、佛の植民地爭奪戰は一六八五年から一八一五年まで續いてゐる。その當時、チヤルース二世は、佛王ルイ十四世と結んでオランダと戰つてゐたが、やがてオランダの勢力が衰へて來たので、この同盟を中止した。フランスが新しい競爭者とし、海上權及び植民地競爭の敵手となつて來たからだ。ルイ十四世時代フランスの國運は植民地に於ても盛んであつた。前にも述べたやうに當時はコルベールが出て、盛に重商主義を唱へて海外發展に力を致したからだ。

この頃のイギリスの重要な植民地は北アメリカとインドであつた。しかるに、北アメリカでは、イギリスがニユー・フアウンドランド、ニユー・イングランド以南、南カロライナ、ジョージヤ州までの海岸地帶を領有してゐたのに對して、フランスはイギリスより僅か早く十七世紀の初めにカナダの東部地方、及びアカヂヤの兩植民地を開いてゐた。更にフランスはルイヂヤナの廣い地域を占領して、イギリスの植民地を西部及び北部から包圍せんとしてゐた。又インドではイギリスは十七世紀の末期までにボンベイ、カルカツタ、マドラス等の

植民地を占領してゐたのに、フランスは之に對抗して、ルイ十四世の頃、東インド會社を再興して、ポンデイシエリー、シヤンデルナゴロ等を開いた。

かくの如くイギリスの植民地の近くにフランスの植民地が出來て、しかもコルベールの奬勵で次第に隆盛に赴かうといふのを見ては、イギリスたるものも安閑としてはゐられない。かくして英國植民地政策の大敵はフランスとなつた。このことは十八世紀を通じても同じである。その當時イギリスが行つた戰爭は殆んど全部が全部、アメリカ及びインドの植民地を目的としてゐたことは明かである。オーストリヤ繼承戰爭のときにはイギリスはオーストリヤを援助して、フランスの後援を受けてゐたバヴアリヤ公と戰はせて置いて、自らはインドでフランスと戰端を開いたし、又その後の七年戰役(一七五六—一七六三)の際にも、プロシヤ王フレデリツク大王に軍資金を與へて、墺・露・佛の軍隊と戰はせるかたはら、自國はフランスと北アメリカ及びインドで戰つて植民帝國としての地位を確保した。英人クライヴがインドで活躍したのはその時のことだ。オーストリヤ繼承戰役や七年戰役は英、佛の植民地爭鬪を念頭に置くとよく解る。實に名譽革命からワーテルローの戰まで、百二十年間の內、英國はフランスとの植民地爭鬪戰のために六十四年を費したと云はれてゐる。

此の長い間に、イギリスは次第に植民帝國としての地體を確保した。英國民の堅實性は、一定の國是なく、大陸のことに沒頭して海外を顧る暇のなかつたフランス人を打ち負したのだ。イギリスはイスパニヤ繼承戰爭の結果、アカヂヤ、ハドソン灣を得たばかりではなく、七年戰爭の時にはケープ・ブレトン島、カナダ、ミシシツピ河以東のフランス領及びアフリカのセネガル河の流域地方をフランスから得た。その後の戰爭はフランスの報復戰でしかない。けれどもイギリスはアメリカ合衆國の獨立のために北アメリカ十三州を失つた外は、微動だにせず、今日も依然植民帝國の位置を保つてゐる。

五、イギリスの植民

植民地のことを述べるのはあだかも英國を語るのと同意語だと思はれるばかり、今日に於ける英國の植民地は廣大なものである。さうして、今迄、わたくしが物語つてきた處は、この先の英國のことを語る序說に過ぎないとも云ひ得る程にイギリスの業績は偉大である。發見時代に始まる十五・六世紀頃から十八世紀前半に至るまでの各國間に行はれた植民地の爭

奪戰は實に重商主義に端を發する鬪ひであつた。そして、イギリスが世界に覇を稱するに至つた徑路を見ると、かなり專横暴虐の振舞が多く、今日の英國の榮譽ある光輝は實に觀點を代へれば、世界に亙る大規模な海賊的行爲の賜物だつたと云ふこともできるだらう。小盜は縛されて牢に投ぜられるかも知れないが、大盜たるイギリスは今日堂々と地球上に四股を踏んで立つてゐるのである。

わたくしは重商主義のことを述べたが重商主義が「金銀の蓄積すなはち國の富なり」と云ふ根本觀念に立つ限り、そこにははげしい爭奪戰が展開されるのは理の當然でなければならない。當時の經濟思想として、現金そのものを蓄積することを以て國家の富なりと考へた。

卽ち輸出入の差額が國富の尺度となる、國内に多くの富を蓄積するためには國家は出來るだけ外國から輸入を禁壓して、自國の輸出を奬勵する、故に、外國の輸入品に高い關稅を課して自國の產業の保護に努める、又自國產業の獨立のために、原料品供給地として、又製品の捌け場として植民地の確保が必要になる、かくて、マーカンテイリズムは植民戰爭を惹起するに至つたのである。更に又重商主義の實行は本國の利益のために植民地を犧牲に供する結果となり、未開民族の虐待、奴隷賣買の如き幾多の弊害を植民地經營上に釀した。

フランスのコルベールは實にマーカンテイリズムに仕へた最も忠實な從僕の一人であつた。またイギリスとオランダとが十七世紀に屢、海上で爭覇したのも、實にこの新しい經濟政策の生んだ結果に外ならない。なほまた十八世紀の英、佛間の激しい植民競爭もその一結果である。出來るだけ外國の勢力を押へて、自國の發展を計るマーカンテイリズムにあつては、當然各國とも海軍を擴張して抗爭した。イギリス、フランス、オランダはいづれも海軍の充實に努力した國であつて、あだかも、十八世紀後半の帝國主義時代と相似たものがあつた。かかる優秀な海軍力を濫用して、イギリスは當時、海上の各國の船舶を掠奪した。海上では私有財產は認めないと公言して、これらの船舶や貨物を沒收したのである。

けれども、英國の植民事業の大を致した原因の一つとして、見逃してはならぬことは、クロムウエル等に見るやうな淸教徒的な眞摯にして勤勉な精神である。彼等はこの精神によつて、着々と相手國を打ち負かして行つたのである。卽ち淸教徒の自己の天職に勇往邁進する眞摯な信仰と實務に對する精勵の精神とが莫大な資本力と相俟つて、近代英國の產業的發展の礎をなしたのである。さうして、彼等はマーカンテイリズムの新經濟政策を提げて遂に蘭、佛の兩强國を壓倒して、十八世紀には海上の雄者として、又世界の植民王として活動し

た。

ここで英國の植民事業の概略を考究してみよう。イギリスは本來海國でありながら、海を利用したのは比較的後世のことで、チュードル王朝時代である。新航路發見の時にも、イスパニヤや、ポルトガルに先鞭をつけられる始末だつた。そこで、別の航路で東洋へ行かうと企てたが、北米の海岸やスカンヂナビヤ半島の北方の探檢はうまく行かなかつた。十六世紀の後半エリザベス女王時代には、遂にこの方を斷念して、拿捕利船を出して、イスパニヤやポルトガル兩國商船の掠奪を事とした。拿捕利船と云ふのはエリザベス女王の公然の免許を得て、アメリカの金銀を滿載して歸るイスパニヤ等の商船を掠奪する海賊船の別名である。英國の冒險家達は已に以前からデヴオンシヤーの諸港を根據地として、かかる海賊船を出して、イスパニヤに對抗せんとところみてゐた。彼等はイスパニヤ最大の寶庫、アメリカ大陸や東洋の航通路をも冒したりしたので、ここに遂に英、西間の戰爭の一因が生れたのである。

又其の他にも、アメリカのイスパニヤ植民地へアフリカの黑人を奴隷として賣り込んで巨利を博したジョン・ホーキンスの事業に、女王以下大臣までも投資した。またマヂエラン以

後最初の世界一周を行つたり、海上到る處でイスパニヤの商船を掠奪したドレイクの事業を嘉賞して、エリザベスが彼に勳爵を與へたことなどはみなその例である。

かかる海上の掠奪は又植民事業の動機ともなつた。ヘンリー七世の時イタリヤ人カボツトは王の命令で、北米の海岸を探檢し、その後エリザベス朝の時ギルバートは此の地にニューフアウンドランド植民地を建てた(一五八三)。これが實に英國植民地の濫觴である。それから、ウオルター・ローリー卿はヴアージニヤを建てた(一五八五)。併し當時の植民事業は充分の效果を收めることが出來ず、眞の英人の植民活動は十七世紀になつてからである。

東インド諸島及び香料諸島との貿易の目的で、一六〇〇年に東インド會社を設立して、エリザベス女王の特許を得た。それから東洋に於ける英人の活動は活潑になつて、ジエームス一世の時には、イギリスの一商人は我が國に來航して德川家康に國書を呈したりしたが、この方面では遂にオランダの敵ではなく、香料諸島を捨てて、インドに赴き、ここに新しい根據を築くやうになつた。

北アメリカの植民はジエームス一世及びチヤールス一世の頃に盛んに行はれた。初期のイギリス人のアメリカ植民は、經濟的理由の外に、宗教的政治的原因に基いてゐた。本國で迫

害を受けたイギリスの新教徒は、遂に信仰上の自由を求めて、一六二〇年にイギリスのプリマス港を出帆して北米に向つたのである。彼等の乘つてゐた船がメイフラワー號であり、彼等の植民した場所はニュー・イングランド即ち後のマサチューセッツ州である。英國人がアメリカ大陸に植民した動機は敬虔な信仰に出發してゐたので、現在われわれの見る物質的な米人とは隨分かけ離れてゐるではないか。

これらの新教徒達の努力で、アメリカの富源は開拓されたのだ。北部は小農風に、南部は大農風に經營され、軈ては本國資本家達の垂涎の對象となつた。且又棉花の栽培が行はれるやうになつて、愈〻發達した。勞働者も最初は白人奴隷を使役したが、その内にアフリカから黑人が輸入されるやうになつて利益が擧がつた。航海條例と植民地の工業禁止は自國の工業品の販路を失はないためであつた。

英國人がかくの如く海外に雄飛せんとした時に、折から海上に優越權を誇つてゐたオランダがこれを默視する筈がない。かくて蘭英戰爭が勃發することになる。クロムウエルが一六五一年發布した航海條例はオランダの貿易に打擊を加へるのが目的であつた。この條例によると、英國及び英國植民地に輸入される貨物は、その産出國の船か、英國の船舶でなければ

ならない。このことは英國の海外貿易にとつては好都合かも知れないが、オランダにとつてはひどい痛手である。だから、多年に亙る戰爭が開始されたのも無理ならぬことである。實に爭覇は一六七四年まで續いた。

この戰爭は英國にとつてもかなりの苦戰だつた。第一回目、第二回目では、オランダ側が明かに有利で、ロンドン市までも脅かされる始末で、オランダに有利な和議が成立したが、第三回戰では、英國側に軍配が擧つて、英國は北米のオランダの植民地をことごとく覆すことが出來た。これよりオランダの海上權は地に落ちて、英國の世界が來た。そして、次に英國はフランスを相手とするに至つたが、このことは前にも述べた通りである。

さて、英國の最も大切な寶庫であるインド植民地の來歷に就いて物語るべき時である。征服の容易な點で、又獲物の豐富な點で、十八世紀のヨーロッパ植民地政策の決定的對象の一つであつた印度は、十四世紀頃マホメット教徒の侵略があつたことを除けば、一四九八年ヴアスコ・ダ・ガマがその航海路を發見するまではヨーロッパから孤立して睡つてゐた。インドの初期植民に於けるポルトガル人の目的は貿易にあつたが、彼等は十六世紀を通じて、事實上これを獨占した貌だつた。

ヴアスコ・ダ・ガマの船隊はアフリカを迂廻して初めてカリカツト港に到着したのであるが、それから、ゴア(一五一〇年)マラツカ(一五一一年)オルムズ(一五一五年)等がアルブケルケ提督によつて奪取され、彼等は第一の要塞、軍港を手に入れた結果、十六世紀の全時期を通じて、インドを洗ふ海上に關する限り、彼等は絶對的覇權を樹立した。彼等は國家的規模の海賊行爲だけでは滿足せず、掠奪の遠征隊をインドの奥地にまでも送つて荒し廻つたものである。しかし、少數の軍隊しか持たず、インドの封建諸國の抵抗力も強く、ポルトガル人の獲得した地域は、ゴマの周圍の狹少な地片に限られてゐた。

インドの胡椒、藍、綿織物、インドネシヤの香料、支那の陶磁器に依る貿易の獨占を策したポルトガル人は、競爭相手たる回教の商人の船舶や船員に對しても、兇惡な掠奪と殺戮とを擅にした。そして、海上の安全な航行が再び回復されたのは、イギリス・ペルシヤ聯合軍が一六二二年にオルムズを奪取して、十七世紀の初期を通じて、オランダ及びイギリス人によりポルトガル人が完全に驅逐されてからのことである。

ここで注意して置くべきことは、イギリスの東印度會社の設立である。初期の印度は直接英本國の領土ではなく、東印度會社なる一會社の支配の下にあつたので、しかもその支配は

全インドに及んでゐたのではない。當時の東印度會社の目的は、單なる交易にあつたので、十八世紀になつて英佛戰爭によつてインド政治の爭覇にまき込まれるまでは政權をインドに確立せんとすることは豫想してゐなかつた。

オーストリヤ繼承戰役以來、パリ媾和まで、コロマンデル海岸は、英佛のインド爭奪戰の主要な舞臺であつた。イギリスの根據地はマドラスであり、フランス人のそれはポンディシエリーであつた。かくて、ポルトガルを完全に驅逐したイギリスは、フランスと爭奪戰をすべき立場になつたのである。佛領印度の總督デユプレーはポルトガル人やオランダ人の經驗に追隨した巧妙なる外交家である。彼は地方諸侯の紛擾に干渉し、それによつて尨大な軍事的優越性を盾に、彼等をフランスに服從させ、イギリス人と抗爭する同盟として利用せんとした。又彼はシポイ(土着雇傭軍隊)を訓練した。

其の後、戰況はフランスに有利に展開して一七四四年に彼等は英國の根據地マドラスを奪取した。そして、この問題を解決したのが、エクス・ラ・シヤプルの媾和で、マドラスはルイスブルツクと引換へにイギリスに還附された。しかし、これで戰爭は終了したわけではない。

フランスは當時、印度の東南地方のカルナチツクに侵入して、これを勢力下に置いた。一七五一年イギリス人は奇襲を以てカルナチツクの首都ルコットを占領した。この戰鬪で有名になつた、東印度會社の書記ロバート・クライヴは、マドラスの附近でフランス軍を擊ち破つた。フランス軍隊内部には、不和、紛擾が次第に擴がり、暴動さへ勃發した。ラリーは殘兵を率ゐてポンデイシエリーに立籠つたが、遂に英軍のために陷落して、東南インドにおけるフランスの支配は脆くも潰えたのである。

ルイ十五世の大臣たるダルジヤンソンは「吾々はインドに領土を持つてゐる。但し、私はこの領土を一個の胸飾りと引き換へに讓つてもいい」と云つたさうであるが、本國の支援が極めて微溫的であつた點に敗北の原因が潛むのではあるまいか。フランスの敗退と共に、オランダの勢力もクライヴの巧妙な方法で、干戈を交へず剿滅された。

これまでは列强とイギリスとの爭覇戰の大要であるが、一八五八年に東印度會社は廢止され、その管轄に屬する全領土が英國王の統治下に移るまでは、モガール帝國に對し、又その他の土人に對して撓みなき激しい獲得戰が展開されなければならなかつた。印度は決して野蠻未開な地方でもなければ、人煙稀と云ふ譯でもない。それは他の植民地の如く單純なもの

ではなく、全く特殊のものである。メキシコがスペイン人によつて征服されたやうに單純のものでもなければ、又フランス人に支配されたアルジエリヤのやうに組織的のものでもない。故に英國人は武器を用ひて印度人を壓迫する一方、巧みな手腕で、異人種間の爭鬪を激成せしめたり、印度敎徒と回敎徒を反目せしめたり、其の他藩王と藩王とを敵視せしめる等あらゆる苦肉の策を用ひて、その勢力の扶植に努めた。

その内でも最初のベンガルの總督ウオーレン・ヘースチングなどは、在職十一年の間に猛烈な征服主義を實行したのである。彼はあらゆる亂暴極まる方法で內地の諸王に戰鬪を挑み、殘忍酷烈な態度で印度人を壓迫した。一七五六年ベンガル王がカルカツタを襲擊して百四十六名の英人を窒死せしめた所謂「ブラツクホール」の慘劇なども、その因を糺せば、英國人の苛酷な壓迫に對する不滿にある。

更にまた、東印度會社は十八世紀の中葉から、印度人を訓練して軍事に使役して來たが、これが所謂シポイである。これは土人兵の英國の印度征服に盡した功勞は實に莫大で、その兵數は十九世紀中葉には三十萬の兵士のうち六分の五を占めてゐたさうである。しかし、英人は彼等に對しても極めて非人道的であつた。シポイを酷遇し、虐待する樣は殆んど動物と

擇ばず、彼等の面前で、其の神聖視するものを破毀して恥なかつた。かくて、東印度會社が彈藥筒に牛・豚の脂を塗ることとなつた處、平素牛を神聖視してゐる印度教徒の土人兵は之を好まず、それに普段のイギリス人に對する不平、不滿も加はつて、一八五七年にベンガルに土兵の反抗が起り、これはやがて全土に波及して、英國人を虐殺した。これが、所謂大叛亂、若はシポイの反と云ふものである。

かう書いて來ると、英人の植民地に對する罪惡史を綴る結果に陷るのであるが、優越なる白人として、しかも肉體勞働力の多量が、土地開發上に必要な植民地經營の場合に、その地の土人や黒奴を使用することは便宜のことに相違ないが、その苛酷な取扱ひは往々人道の領域を越えて極端にまで走つたことは無視出來ない。西印度諸島中最大なジヤマイカ島の出來事などはその一例としてわれわれに想起されるところである。英人はここで甘蔗の栽培を開始すると、多數の黒人奴隷を使役した。當時黒人の數は三十萬に達した。しかし、英人がこれらの黒人を酷遇したことは到底他に其の比を見ない。些小な懈怠に對しても笞刑を課したり、又鎖で縛して死に瀕せしむることも度々だつた。銃殺、焚殺の如き殘酷な私刑は殆んど公然と默認される有樣であつた。それがために奴隷一揆が屢ゝ起つたが、これが鎭定された

場合に行ふ刑罰に至つては實に戰慄すべきものがあつたといはれてゐる。近世植民學の大家、ルロアボーリューは黒人を奴隷としたことを、歐洲勞働者を使役したこと、インド人を滅した事と共に英國のアメリカ植民てふ佳美なる繪畫に於ける三大汚點なりと稱してゐるのも蓋し當然のことである。

如上の色々の醜い事件や土人の反亂が起つたが、東印度會社はクライヴの力によつて競爭者フランスを驅逐し、ついでヘースチングが同會社の支配權を擴張してから、着々とインドの經營は進捗を見て、十九世紀半頃にはその大半を領有するに至つた。さうして、一八七七年にはイギリスはインド帝國を建てて、本國の直轄とし、ヴイクトリア女王がインド皇帝を兼ね、又インド事務大臣は本國政府の一員として臺閣に列し、又インドには總督が派遣されて之を統治することになつた。

さてわたくしは前に重商主義が十七世紀に於ける植民地爭鬪戰の最も大きな原因であることを述べたが、重商主義は十八世紀に入るに至つて、徒らに人民の海外企業熱を煽る不眞面目な思想であると考へられるやうになつた。國家經濟の事業を、未知不案内の海外に求める結果、國内の經濟を非常な不安に陷れる場合が少なくなかつた。英人の企業家ジョン・ロ

ーの失敗はフランスの財界に大恐慌を起し、フランスは一時經濟的破産狀態に瀕したといふ有様である。同様にイギリスでも南海會社が、その企業が確實な基礎に立つものでないことを暴露して、財界に非常な危機を醸したのであつた。またイギリスの廣大な植民地として重きをなしたアメリカ合衆國の獨立も、イギリスの植民政策に對する反抗に外ならなかつた。即ちここではマーカンテイリズムは、國家干渉、國家中心主義としてその全貌の一部を覗かせたのだ。マーカンテイリズムの政策では、その植民地を純粹なる農業地たらしめ、一切の製品を本國に仰がしめてその利を獨占せんとするので、イギリスの航海條例の如きはその最も甚だしいものと云はなければならない。即ち「植民地は本國のために存在する」のである。

かくて十八世紀後半に入つて、重商主義の弊に再び陷らないために、國富の根柢を不確實な外國貿易に置かないで、自國の國土に置かうとする堅實な思想が起つて來た。これが即ちフランスのケネー等一派の唱へた「重農主義」で、農業を保護し、重商主義の束縛から農業を解放せんとする叫びである。さうして、この思想の更に發展したものが、十八世紀後半のアダム・スミスが唱へた自由貿易説である。アメリカ獨立の根據は又この説に負ふ處が多い

だらう。重商主義のイギリスの植民政策は、アメリカの獨立によつて貴い反省を與へられた。

六、帝政ロシアの植民地侵略

ロシアが、モスコーを中心とする民族國家として歴史の舞臺に登場したのは十五世紀の末葉である。近世植民運動の發動力ともいふべき經濟的方面から云へば、ロシアは西歐諸國に比して著しく後れて居り、西歐に於て農奴制度が既に消失し去つた頃に、ロシアに於ては漸くそれが出現したやうな有様であつた。從つてその植民も他の諸國に比して著しく立ち後れてゐたゝめに、南方に於ては僅かに黑海沿岸に若干の港を持つのみで、それ以上はイギリスを背景とするトルコの障壁によつてさへぎられてしまつた。かくてロシアの植民地は大陸的發展として、特に東方に延びざるを得なかつたのである。これには勿論ロシア民族國家の占める地理上の位置も重要な原因をなしたものといふことが出來る。

ロシア人は一五八四年にシベリヤを征服し、黑龍江沿岸に於て植民を企てゝ支那と衝突し、ネルチンスク條約(一六八九年)によつて黑龍江地方を支那領と認めて落着した。ロシア

人がカムチャツカよりアラスカに渡つて獸皮貿易に從事するに至つたのは此頃からである。

ロシアのアジア發展は、コーカサス方面、中央アジア方面、及び極東方面の三つに區分することが出來る。コーカサス地方は一八七八年に一とまづ征服され、トルコ帝國のアルメニア地方はその直轄地となつた。ロシアの支配階級はこれらの地方の資源を收奪したばかりでなく、土着のカーカサス人やトルクマンの遊牧民等から土民軍を編成して、自己の支配のために利用したのである。

中央アジアの經略に着手したのは、今から凡そ三百年前頃からである。特にロマノフ朝のペートル大帝の時代に至つて、トルキスタン地方の金鑛を獲得し、併せてインドに至る貿易路を求めんがために中央アジア經略の軍を起した。一時は土民軍のために敗退したが、一七二二年にペートル大帝は親ら十萬の兵を率ゐてペルシヤに侵入し、カスピ海沿岸の要地を悉く併呑した。大帝の時代以來ロシアはヨーロッパに接近して大いにヨーロッパ文明を吸收し、商工業も漸く勃興して、從來の自然經濟からの脱却を開始するに至り、その植民地經營も次第に近代的な色彩を帶びるに至つた。ペートル大帝の死後間もなくトルキスタンその他の地はペルシヤの手に奪還されたが、その頃からロシアは中央アジアの門戸ともいふべき

キルギス曠原を蠶食しはじめた。一七三七年に、現在のオムスクの地にオレンブルグを建設してキルギス族を制壓し、オムスクとの間を要塞化して、各地にコサックを屯田させた。キルギス族は當初は大いに反抗したが、ツアー政府の分裂政策によつて衰勢に赴き、一八二四年には酋長の主權を奪ひ、ロシア政府の直接の支配を施した。一般に支配民族の權力者等は弱小被抑壓民族の民族的特性を抹殺破壞しようとするものであるが、キルギス人に對してもさうであつた。ロシアの侵略に對してキルギス人の氏族組織は特有の團結力を發揮したのであるが、勝利したツアー政府は、その氏族組織の破壞に全力をつくしたのである。例へば、政府の行政支部は、ある氏族の一部成員が他の氏族の一部成員と混淆されて一群に屬するやうに目論まれてゐる。これは同一の群に於ける諸民族の鬪爭を惹起せしめて、キルギス人の團結を阻止する役目をなした。さうした上でそれらの群は、ロシアの監督人や裁判官や移民官吏の下に支配せられたのである。キルギスの族長等は、その氏族に對する政治的な自主權を剝奪された代りに、ロシア本國の資本家や商人の植民地代理人として、その商品販賣、高利貸付等に從事して中間の利潤を與へられてゐた。

十九世紀の中葉、ニコラス一世の時代には、トルキスタン、トランスカスピ等の諸地方を

占領して軍政を施いた。十九世紀に於けるロシアの植民は益々世界政策的となり、ロシアの南下政策は、インドを擁し、トルコの背後勢力たりしイギリスとの對立を增大し、一八六四年には英露間に戰爭の危機さへ生じたほどである。その時ロシアの外相ゴルチヤコフは南方經略に關する辯明書を發表して、「文明國人が野蠻蒙昧なる隣人と安寧なる生活を共にするは不可能であるから、之を征服して永久に禍根を絕つ必要がある」と云ひ、又他國領土の侵略意圖のないことを聲明したので事なきを得た。その後更にボハラ、コカンド、ヒヴアを征服して四州を劃し、トルキスタン州總督の管轄下に置いて之を支配した。トルキスタンは棉花の產出地として有名であるが、ロシア人紡績業者等の利益を守護してゐるツアーの政府は、トルキスタンに於ける紡績工場の建設を許さなかつた。トルキスタンの棉花は中央ロシアに運ばれた。トルキスタンの棉花は中央ロシアに運ばれ、ロシア工業家の工場に於て更紗木棉とせられた上で、再び幾千露里もある彼方のトルキスタンやボハラやヒヴア地方及び、北部ペルシヤへ持ち運ばれた。本國の資本家は、植民地自身の產業の發展を抑止することによつて、地方產業との競爭を脫れ、永久に植民地を本國商品の市場として利潤を吸收しようとしたのである。

ロシアは更にトランスカスピ地方のトルクマンを攻擊して一八八一年にゲオクテツペの敵本據を陷れた。この戰でロシヤ兵は八千のトルクマンを屠殺したといふ。ロシヤは戰後各地方を合せて廣大なるトランスカスピ州を設定してマホメツト敎國に於ける大勢力を扶植したのである。

ロシアの極東侵略は、十九世紀の中葉にムラヴイエフ將軍が東西シベリヤ總督となるに及んで急速に發展した。彼はウスリー河沿岩の朝鮮國境に發展した。彼はウスリー河沿岸の朝鮮國境に近い地方に侵入し、更に太平洋沿岸を侵略しようとした。一八五四年には黑龍江の下流を占領し、また彼の部下はニコライエフスク及び樺太沿岸をも占領した。一八五七年支那との間に愛琿條約を結んで愛琿より黑龍江河口に至る左岸一帶を確保した。また北淸事變に際して、ロシアは調停の勞を取つた報酬として、北京條約を結んでウスリー河及び興凱湖より、圖們江の河口に至るまでを露領とした。

一八七四年には樺太や我が北邊を脅やかして、遂に千島と樺太との交換をなした。ロシヤの東進政策は遂に日露の開戰となり、敗戰の結果、南滿洲のロシヤ軍を徹退し、樺太の南半を日本に割讓した。

シベリヤ鐵道、トランスカスピ鐵道、トランスバイカル鐵道はアジアに於けるロシアの植民並に軍事的地位にとつて缺くべからざるものとなつてゐるが、十九世紀末にはロシアの鐵道は既に三萬粁に達した。シベリアへは數十萬の農民の家族が送られた。本國に於けるこれらの農民は破産しつゝあつた。彼等はシベリアの酷烈な自然條件の下に勞働しなければならなかつた。更に注意すべきは、シベリアが囚人の追放地として徒刑的植民地の性質をも持つてゐたことである。東方アジアの原住諸民族や、ツアーの官吏の慘酷な鞭の他に、これら無賴の植民者達によつて荒廢せしめられたことは云ふまでもないことである。

七、ドイツの植民地獲得

ドイツの植民は他の西歐諸國に比して著しく後れて發展した。十二・三世紀の頃ハンザ同盟を結成したドイツの都市商人等は、地中海中心の外國貿易に強大な勢力を振つたが、しかし、世界に於ける「發見の時代」が始まり、東印度、アメリカへの航路が拓け、世界商業の中心が、地中海より大西洋に移るに及んで、ドイツの海外發展は一時停頓するの狀態に陷

つた。ドイツの植民が、他の諸國に比して後れた原因は、ドイツの資本主義の發展と、その民族的國家統一の後れた點にあるといふことが出來る。實際に於て、ポルトガル、スペイン、オランダ、フランス、イギリス等の諸國が、旺に印度洋及び大西洋に於て爭覇の努力をつゞけてゐた間に、ドイツはその國内統一の問題に苦惱しつゞけてゐたのである。

勿論、個々の少數ドイツ人による植民は、すでに十六世紀の初葉以來行はれて居り、ニュールンベルグの航海業者、ブランデンベルグの貿易業者等は、南米のヴエネヅエラに商事會社を設立し、十七世紀にはアフリカ西海岸にも植民したが、ドイツの國民的後援がないために中途で立消えになつてしまつたのである。

ドイツの眞の近代的植民は、實に十九世紀の末葉にはじまるといつても過言ではない。しかも歐洲大戰前までの近々三十年間に、ドイツは、フランス、イギリスに互して世界の一大植民國となつたのであつて、その組織的、精力的な活躍は實に驚歎すべきものであるのである。

一八七〇年から七五年に至る、いはゆる産業基礎年間に始まつた一大産業革命は、從來の農業國ドイツをして一躍工業國ドイツに轉化させた。一八七八年にロートリンゲンで鐵鑛中

の硫黄を燒却する方法が發明されて以來の產出は急速に增大し、之に加ふるにライン地方、ウエストフアーレン、シレジヤ、及びザール地方の豐富なる石炭產出は、ドイツの近代工業の發展に巨大なる拍車をかけた。科學の應用、組織的な工場經營によつてドイツは次第に先進資本主義諸國の生產を凌駕するに至つた。交通機關は整備し、人口は急速に增大した。これらはすべてドイツの海外植民地發展に對する熱望を喚起する原動力となつたのである。

ドイツの植民地進出は、大體に於てこれを二つの時期に區分して考へることが出來る。第一期は一八八四年より一八八六年に至るもので、その間アフリカの各植民地及び南洋諸島を獲得した。後進資本主義國として張り切つてゐたドイツは、十八九世紀を通じてすでに諸國によつて獲得されてゐた世界の各地に割り込んで植民するためには、必然に强固な國家主義的保護政策を採用しなければならなかつた。政治、經濟的保護と竝んで强大な軍備がドイツの通商は滔々として世界市場に氾濫し、ドイツ人口もまた之に伴つて移住した。「余は元來植民的人間にあらず」と自稱した鐵血宰相ビスマルクが、海外拓植に傾いたのは一八八四年のことであつた。

ビスマルクは先づ、ブレーメンの商人リュデリッツに對して、そのアメリカ進出に援助す

べきことを申出た。彼はアフリカ西岸のアングラ・ペクエナ港に目を着けたのである。命を受けたリュデリッツは、一八八三年、ハインリツヒ・フオーゲルザングを派遣して同港を占據させた。この地はリュデリッツ灣と改稱された。フオーゲルザングは土地の酋長から、幅二十哩、海岸に沿うて南方、オレンヂ河に至る土地を買收したのであるが、その買收に要した費用は、僅かに百挺の小銃と小量の彈丸と二百磅金とであつた。翌八四年にドイツ政府は公式にリュデリッツ灣をその保護下に置くことを英國に對して通告、ドイツ官憲が同地に上陸した。

チュニス駐在ドイツ總領事グスターフ・ナハチガル博士は、同年に之も同じくビスマルクの祕密命令を受けてアフリカ西海岸を南下し、トゴランド、カメルン、リュデリッツ（これはすでにフオーゲルザングによつて占據されてゐた）を占領した。ビスマルクは得意の外交手段によつて、この既成事實を競爭國たる英國に承認せしめたのである。

同じ一八八四年、ドイツ人カール・ペータース、プフアイル伯及びユーケル博士等は英國勞働者に變裝して、アフリカの東海岸、ザンジバル島に上陸して內地に入り込んだ。ペータースがその保護下に置いた地域は六萬平方哩に及んだがその獲得費は殆ど問題にならなかつ

た。當時ザンジバルの王妹でハンブルグ生れの一商人と結婚したものがあつたが、彼女は寡婦となつたとき兄王に對して父の遺産を請求した。ドイツ政府は之を援助し、巡洋艦を派遣して、八四年之と土地割讓に關する條約を結んだ。

かくの如く、敏速且つ巧妙に、先進諸國の植民地の空隙を縫ふて東西アフリカ沿岸の各地を占據したドイツは、アフリカに對する世界的發言權を獲得するに至つた。卽ち、是より先き、ベルギーのコンゴー割取以來西歐諸國のアフリカに於ける領土獲得競爭の激化は憂慮すべき事態に立至つてゐたので、ビスマルクはフランス政府と結んで、アフリカに利害關係を持つ歐洲諸國及び米國を一八八四年十一月ベルリンに召集して、いはゆるベルリン會議を開いて、コンゴー問題を中心としてアフリカに關する一般問題を討議し、これは後に修正されて條約として締結された。その中で注目すべき事柄は、奴隷賣買の禁止に關する宣言であらう。これはヨーロッパ諸國が封建的支配から脫して近代的資本主義經濟に發展した事實に照應するものであつて、從來の植民地獲得は、單純なる掠奪乃至商業を主としてなされたもので、奴隷狩や奴隷貿易がまた重要な目標となつてゐた。しかし產業資本の發展は更に新しき一歩を進めて植民地自身の產業開發に着手し、之によつて土着民族の勞働を酷使して原料生

產を增大する一方、かくして獲得された原料を本國に輸入して工場に於て製品となし、之を再び植民地に賣りつけて利潤を獲得するといふ合理的方法をとるに至つた。それは人格間の自由なる通商、自由なる契約といふ形に於てなされた。さういふ意味でドイツのアフリカ進出は一つの時代を劃するものと見ることが出來やう。奴隷廢止の宣言によつてドイツが自己の植民を有利に導いたことは疑ふべくもないことであつて、從來積極的に奴隷賣買を行つて來たイギリスの如きも、遂にドイツに追從して、その東アフリカ占領に當つては「奴隷貿易を根絕せしめるためには……奴隷を作り出す東アフリカの奥地に權力を及ぼし、之を壞滅しなければならぬ」との口實を用ひてゐる。

ドイツはその後、ザンジバル王の權利を四百萬マルクで買ひ取りとゝにいはゆるドイツ領東アフリカを確立したのである。東アフリカ植民地は、主として特許植民會社（國家最高權を委ねられ、領土權、司法、財政權を與へられた）の經營するところであつたが、彼等は、原住民の氏族組織を破壞し、土地を奪ひ、土人を無所有の狀態に陷れた後にこれを新しい近代的な「奴隷」卽ち賃銀勞働者として使用したのである。しかしこの方面の土人は案外頑强で、しば〳〵紛擾を起したので、一八九一年以來會社は一切の主權をドイツに引渡し、爾

後は單なる商事會社となつた。

南洋方面に對しては、一八七九年に、南洋貿易拓殖會社が活躍して居り、又一八八四年に成立したニューギニヤ會社は、ニューギニヤ島北東部及び附近のニューブリタニヤ、ニューアイルランド諸島に植民した。

ドイツの植民地獲得の第二期は、ビスマルク辭職後の皇帝ウイルヘルム二世の時代であつて、ドイツの帝國主義的植民地政策はこゝにその基礎を確立するに至つたのである。從來アフリカ西岸の領土は先進諸國への遠慮から單に保護領としてゐたのを一八九〇年ビスマルクの辭職後は之を公然たる植民地として經營し、その費用一切をドイツ帝國が負擔した。之と共にドイツは軍備の大擴張を行つて海外發展に全力を注ぎ、特に一八七九年、九九年の間には、南洋のパラウ、カロリン、マリアナ、サモア島、及び支那沿岸の膠州灣をも獲得して未曾有の發展を見たのである。これらの發展は、いたる所で先進諸國、特にイギリスとの對立摩擦を生じ、その都度、協定乃至條約を締結して戰爭の危機を避けて來たが、二十世紀に入つてもなほ滔々として止まるところなき大ドイツの植民地進出運動は、遂に近來に於て英國との決定的な衝突に導き、歐洲大動亂の因を作るに至つたのである。

八、イタリーの植民地獲得

イタリーの植民はドイツと同じく十九世紀の末葉であつて、一八七〇年代にはじまつた。イタリー王國は一八六〇年に至つて漸く確立された。神聖ローマ帝國はこの統一に對して大きな障害をなした。こうした後れた國家の行き方は大體に於て一致してゐる。イタリー新國家の商工業は保護關稅及び政府の奬勵等によつて保護されたのである。これはイタリーに於ける資源、特に石炭の不足を補つて、後年の發展を致す根本動力となつた。農業國イタリーは急速に工業化した。增大する人口と新しい生產品のはけ口は次第に高まる列國の關稅障壁によつて阻止された。イタリーにとつて植民地の獲得は止むに止まれぬ熱狂的な慾求となりはじめた。しかも世界はすでに一應分割されてゐる。イタリーの行くべき道は自ら規定された。イタリーはその陸海軍を急激に擴張し、普通兵役制度を實施し、近代的な軍艦の建造に着手しはじめた。一八七七年八月には新海軍計劃を決定し、一八八四年五年には、二億一千五百萬フランの巨費を投じて陸軍八ケ年計劃を建てた。一八八〇年にビスマルクは「今日の

イタリーは、もはや平和を愛する保守的國家ではない」と主張するに至つた。

かくして後れたるイタリーの植民地進出は現實となつたのである。イタリーがその植民地開發に於ても地中海中心的とならざるを得なかつたのは、その進出が後れてゐたためと、その地理上の關係からする必然であつた。はじめアフリカのソマリ海岸及び紅海のアサブ港に植民したが成功しなかつた。後エジプトの土人がイギリスに對して叛亂を起したのに乘じて、マソワ及び其附近を占領し、エチオピアと戰ひ、遂にメネリックを王として之と條約を結んで商業的利權を獲得した。一八八九年には保護條約を締結した。イタリーの權力擴張に反對したメネリック王は一八九六年イタリー軍をアドソに於て敗退せしめて、エチオピアを獨立させた。その結果イタリーは辛じてエリトリヤのみを領有することになつた。エリトリヤは、これより先き、一八九一年にイギリスとの條約に基いて占領したものである。

一八九二年はソマリランドをイタリー領として獲得した。その南部、ベナジルは一八九六年以來イタリーのベナジルに會社が許可を得て政治經濟上の全權を握つてゐたが、後に政府の直轄地となつた。北部地方は土人保護領であつて農業上餘り見るべきものがない。地中海に於ける覇權の爭はフランスとの對立を見るに至つた。アドワの敗戰はイタリーはそのフ

ランスとも妥協しなければならなかつた。即ち一八九八年に伊佛通商條約を結び、一九〇〇年に至つてトリポリに關する協約を結んで、イタリーはモロッコに於けるフランスの利益を、フランスはトリポリに於けるイタリーの利益を、相互に承認した。然るに、その後、フランスはドイツと結んでモロッコの權力を增强せんとしたため、イタリーも亦積極的にトリポリに進出し、そのため遂にトルコとの對立激化して一九一一年一二年の伊土戰爭を惹起するに至つた。この戰に勝つたイタリーは廣大なるリビヤの地を獲得して、茲にはじめて數十年來の植民地獲得の熱望を充たすことが出來た。トルコ沿岸の多島海に於けるロード島その他の小島を得たのもこの時である。これが大戰前二十世紀初葉の狀態であつた。

工業の急速な發展を見つゝあつたとはいへ、大戰前のイタリーは大體に於て農業國であつた。從つてイタリーは增大する國內人口をドイツのやうに國內工業に吸收することが出來なかつた。從つてイタリーでは植民地の獲得は主として海外移民を送り出すためと必要とされてゐたのである。實際に於てイタリーの海外移民者數は年々多數に上つてゐるが、しかし結局イタリーが獲得した植民地は白人の生活に適しない風土であつたので、移民の大部分は更に他の歐米諸國へ流れ込むといふ實情であつた。從つてイタリー政府はこれら移民の植民地

定住を策し乍らも、他面進んで植民地よりの原料吸收に努力したのである。

版權所有

昭和十四年八月五日印刷
昭和十四年八月十日發行

定價金拾五錢

著者　日本青年外交協會編纂

發行者　東京市麹町區六番町三番地四　長谷川武夫

印刷者　東京市牛込區市ケ谷加賀町一ノ十二　若林吉郎兵衛

發兌　日本青年外交協會出版部
東京市麹町區六番町三番地四
電話九段(33)二九八三番
振替東京八三五七三番

大日本印刷株式會社印刷

390
462